

手塚雄二展

プレスリリース

Press Release

光を聴き、風を見る

手塚雄二《秋麗》(部分) 2015年、個人蔵

東京藝術大学の教授であり、日本美術院の同人として活躍する手塚雄二（1953年生まれ）は、今年で院展初出品から40年の節目を迎えます。指導者として多くの後進を導きながらも、院展第五世代を代表する作家として精力的に制作を続け、現代日本画壇を牽引しています。そして日本の伝統美に寄り添いながらも現代人の感性をもって捉えるその作品は、常に新しい日本画の在り方を示してきました。

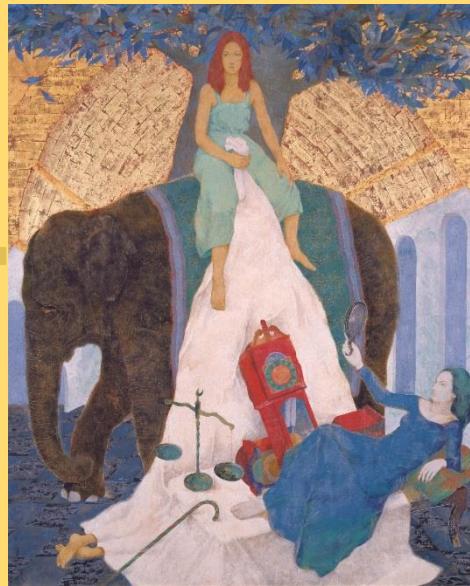
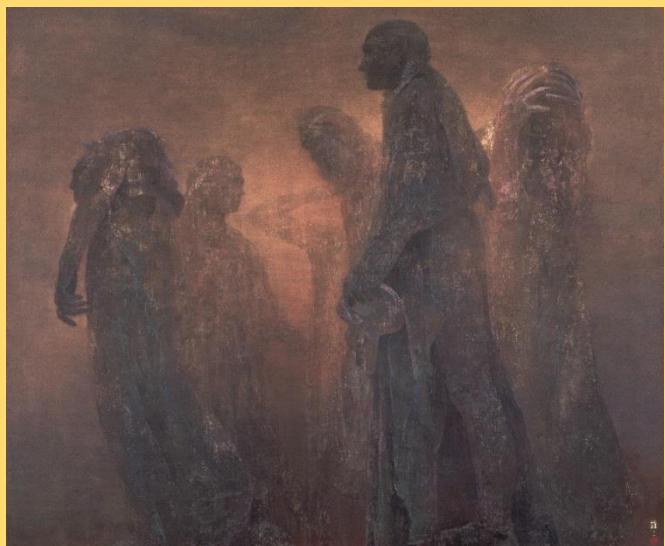
本展は画家の回顧展として過去最大の規模で開催するもので、大学の卒業制作から近年の院展出品作まで約70点の代表作が一堂に会します。大画面に展開する煌びやかで壮大な世界、あるいは詩情あふれる雅な手塚芸術を紹介する貴重な機会となります。また初公開となる画家のスケッチや下図など約80点を併せて展観し、画業の全貌に迫ります。

展覧会構成

「シュール」への憧れから自然へ

手塚は大学在籍時よりシュルレアルな作風に強く惹かれ、人物を主なモチーフとして幻想的な構成の中に風刺やメッセージを込めた作品を描いていました。在学中の結婚、そして長女の誕生を経て、次第に自然への想いを強くしていきます。「シュール」から画家の代名詞ともいえる風景画へ。初期の作品から日本美術院賞・大観賞3回連続受賞の作品までをご紹介します。

《市民》 1991年、セレネ美術館蔵

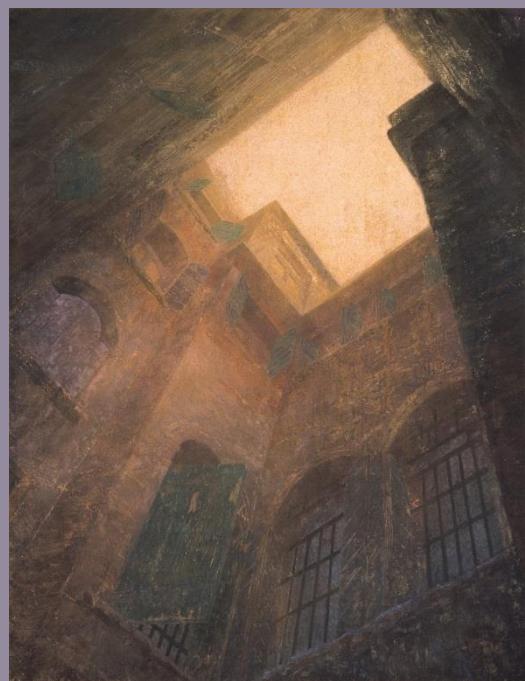


《夢模様》 1980年、個人蔵



《氣》 1984年、個人蔵

《裏窓》 1992年、個人蔵



1992年に39歳という若さで院展同人に推举された手塚は、更なる飛躍をみせます。この時期には大自然の威力や神なる力などスケールの大きいテーマに大画面へ挑んでいます。一方で虫食いの枯葉や散りかけの花など儂く小さき“かそけきもの”への共感もみせ、表現の領域を拡張しています。雅で繊細な表現から、力強く重厚感に満ちた作風への変化をご覧いただきます。

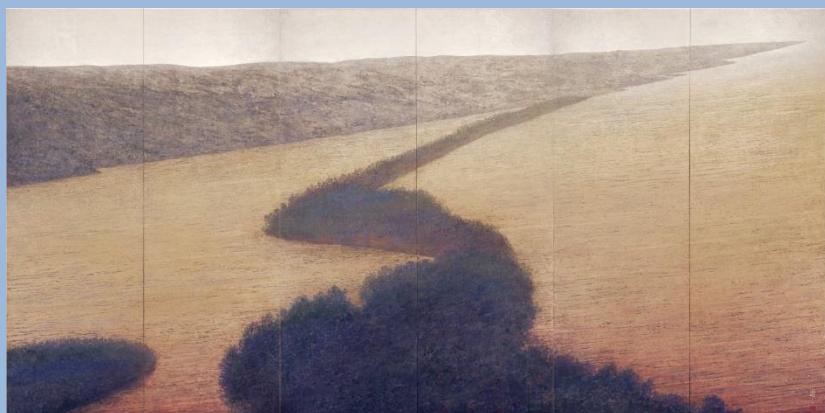
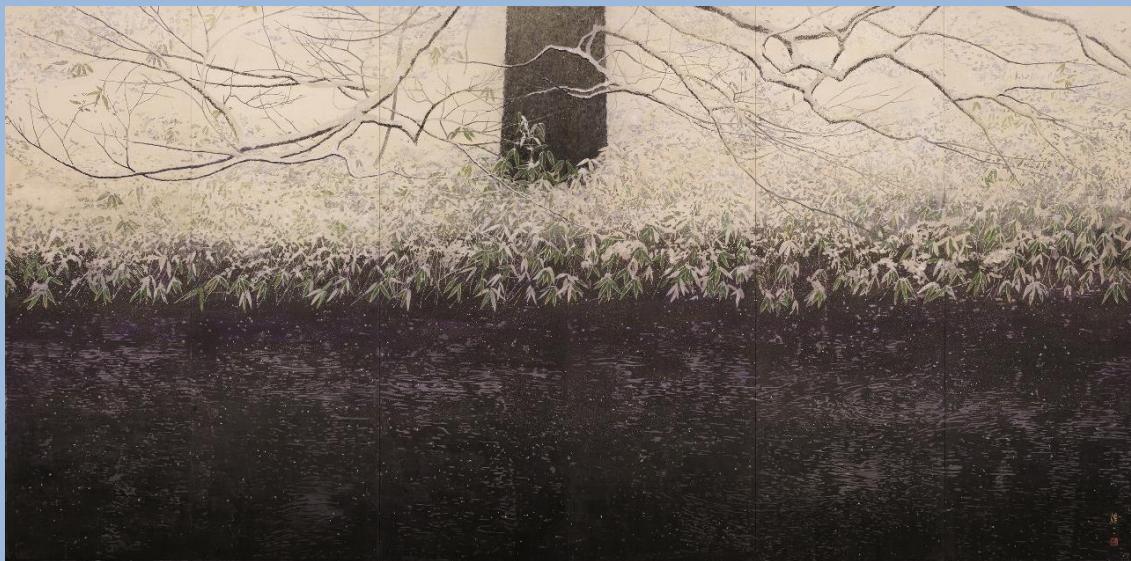
2 大胆、かつ繊細な視点



右:《雷神雷雲》1999年、左:《風雲風神》2000年 ともに今井美術館蔵

3

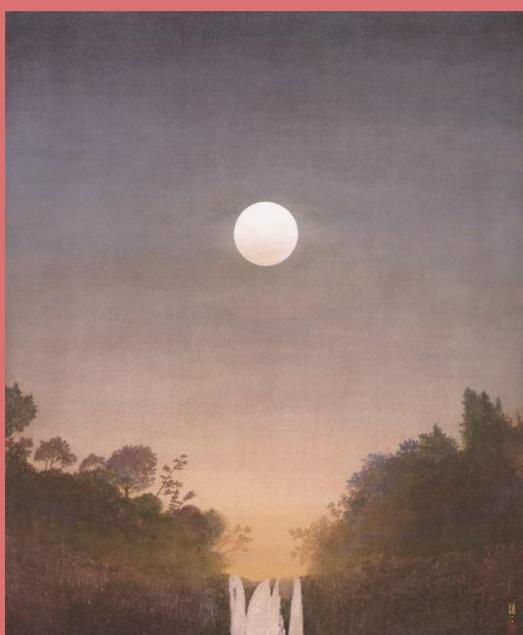
自分探しの旅
—「軽井沢」シリーズほか



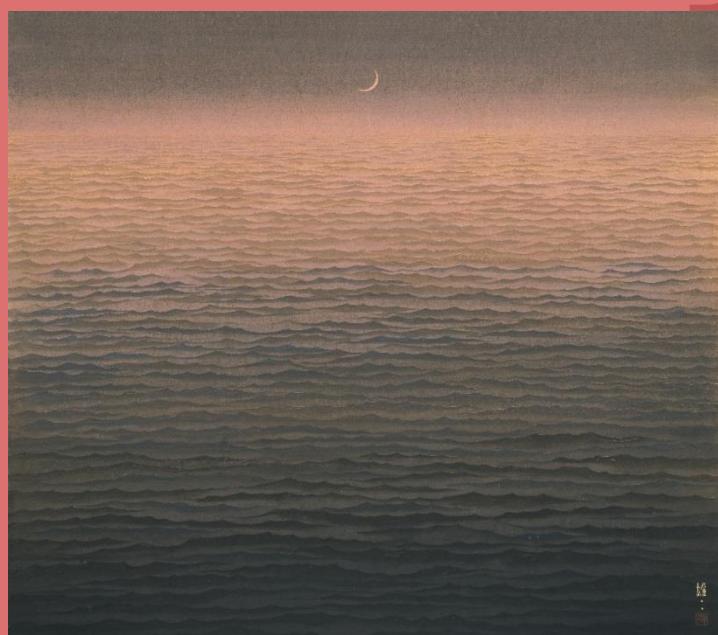
《天橋立》 2012年、足立美術館蔵

画家を象徴する風景画において、スケッチは制作の要の一つです。画家は様々な場所を訪れてはスケッチに描き、イメージを養っています。近年は「絵になる風景」の宝庫だという軽井沢に別荘を建て、制作に取り組んでいます。軽井沢シリーズを含む、手塚の豊かな風景表現をご覧いただきます。

祈りのかたち——「明治神宮内陣御屏風（日月四季花鳥）」に挑む



《月明那智》 2010年、足立美術館蔵



《月読》 1999年、奈良県立万葉文化館蔵

4

5 内なる宇宙—— お茶との出会い



《きらめきの森》 2005年、個人蔵



《棗（あひみての）》 2018年、個人蔵

手塚は茶道との出会いによって、それまでの外界への関心は次第に自身の内面へと向かうようになりました。お茶を通じて到達した画家の新しい画境を示す作例とともに、自身が制作した棗や香合も併せて展示します。



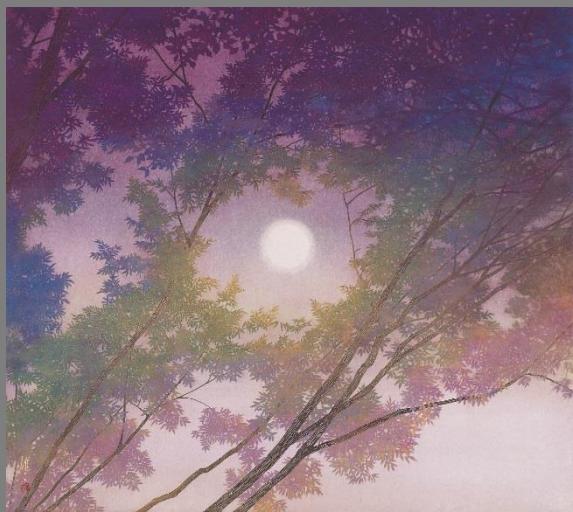
《麗糸》 1999年、個人蔵



《明けの彗星》 2006年、個人蔵



《訪問着 風の色》 2018年、個人蔵



《おぼろつくよ》 2012年、個人蔵

光を聴き、風を観る

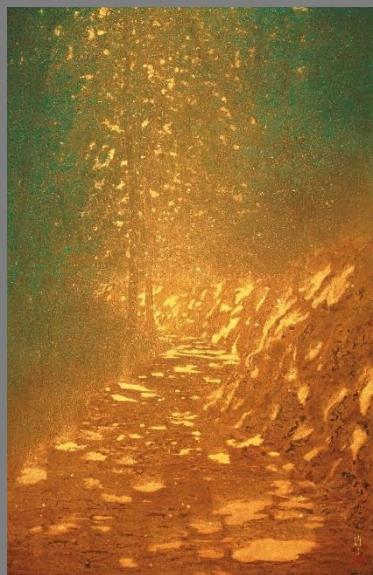
手塚作品における光の表現はいつも神秘的で象徴的です。どこからともなく射し込む超自然的な光、大気中にたゆたう光、かそけきものが放つ仄かな光など。手塚は神の気配を自然に探して、画面に描き込むといいます。そのためには音のない光を聴き、形をもたない風を観なければならないかもしれません。



《風宴》 2004年、個人蔵



《ブルックリンの雨》 2010年、株式会社サンロード蔵



《(い)むれびの坂》 1996年、個人蔵

手塚雄二の 素描

手塚はスケッチを創作の糧とするタイプの画家といえます。スケッチを通じて写し取られた自然は、画家のなかに蓄積され、やがてイマジネーション豊かな絵画へと昇華します。本来は公開されるはずのないスケッチを特別に公開し、画家がこれまで歩んできた軌跡をご覧いただきます。



《那智》1999年、作家蔵

《軽井沢 南ヶ丘》2006年、作家蔵

み | ど | こ | ろ

1 過去最大規模の回顧展！

福井県立美術館の全会場を使用して、本画 75 点を一挙に展示します。大学の卒業制作から近年の院展出品作まで、これまでの代表作が一堂に会します！

2 退官記念展覧会を先行展示！

今年度で東京藝術大学を退官する手塚は、10月に東京藝術大学大学美術館で退官展を開催します。福井では東京藝術大学に先立ち、本画作品と併せて特別に素描作品を公開します！計 85 点の素描作品から、画家の知られざる制作の秘密に迫ります。

3 あの感動再び！

今年6月に当館で開催した「『世紀の屏風絵』特別公開」には、たくさんの方にお越しいただきました。日本画の正統を継承する手塚が紡ぎ出す、雅で華やかな世界が再び福井へやってきます！芸術の秋は日本画の世界に浸りませんか？

関連イベント

手塚雄二特別館長によるアーティストトーク (申込不要・要観覧券)

作家本人が作品の制作秘話やみどころを解説します。

9月6日（金）午後1時半から <展示室内>

学芸員によるギャラリートーク (申込不要・要観覧券)

作品の目の前で担当学芸員がその魅力や鑑賞のポイントをわかりやすく解説します。

9月15日（日）、29日（日）各日、午後2時から<展示室内>

プレミアムナイトツアー (要事前申込) ※各日、定員80名様

閉館後の美術館でプレミアムなひとときを。手塚作品をイメージした音楽を聴き、学芸員の解説付きで会場をめぐります。

9月14日（土）、22日（日）各日、午後5時半から<講堂・展示室内>

料金：一般・大学生1,200円 高校生700円、中・小学生400円（いずれも観覧券とプチギフト）

演奏者：浅川由美氏（フルート）案内人：椎野晃史（当館学芸員）

※申込は当館HPをご確認ください。

日本画の巨匠・手塚雄二の絵画と福井の食を楽しむ会 (要事前申込・会費制)

手塚雄二と共に作品をイメージした創作料理を味わう特別ディナー。

9月20日（金）午後7時から<ユアーズホテル2階・桜の間>

定員：50名 会費：15,000円（予定）

記念鼎談「手塚先生に聞きたい10のこと」 (申込不要・聴講無料)

手塚芸術について徹底討論？10の質問から制作の秘密に迫ります。

9月21日（土）午後2時から<講堂>

登壇者：佐藤道信氏（東京藝術大学教授）、手塚雄二（当館特別館長）、椎野晃史（当館学芸員）

トークサロン「展覧会ができるまで」(要事前申込・ドリンク代別途必要)

本展を担当した学芸員が、展覧会の苦労話や裏話をお話しします。

9月15日（日）午後5時から<美術館喫茶室ニホ> ※申込は当館HPをご確認ください。

見どころ解説会 (申込不要・聴講無料)

観賞のツボを学芸員が20分程度で分りやすくお話しします。

会期中の土日・祝日 各日午前10時から<講堂> ※ただし9月21日（土）は開催しません。

画家はどんな人？



撮影
平間至

1953年	神奈川県鎌倉市に友禅染付絵師の家に生まれる。
1976年	東京藝術大学に入学。
1979年	第34回春の院展に初出品、初入選。
1982年	東京藝術大学大学院修了。 日本画研究室非常勤助手となる。
1989年	第74回再興院展で初の日本美術院賞（大観賞）を受賞。以後、三回連続受賞。
1992年	日本美術院同人に推挙される。
1995年	東京藝術大学助教授に就任。
2004年	東京藝術大学教授に就任。
2013年	福井県立美術館特別館長に就任。

展覧会名	手塚雄二展 (てづかゆうじてん)
副題	光を聴き、風を観る (ひかりをきき、かぜをみる)
会期	令和元年9月6日 [金] ~10月6日 [日] ※休館日なし
会場	福井県立美術館 全展示室 (〒910-0017 福井市文京3-16-1)
主催	福井県立美術館、日本経済新聞社
共催	福井新聞社、FBC
開館時間	午前9時~午後5時 (入館は午後4時30分まで)
観覧料	<p>【当日】一般・大学生1,200円 (団体960円) 高校生700円 (団体560円)、中・小学生400円 (団体320円)</p> <p>【前売】一般1,000円</p> <p>※団体は20名以上。※障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は半額。</p> <p>※前売り期間: 6月7日(金)~9月5日(木) (福井県立美術館にて販売)</p>
展示作品	本画作品75点、素描85点
報道関係の方の お問い合わせ先	福井県立美術館 展覧会担当: 椎野・前田 TEL: 0776-25-0452 FAX: 0776-25-0459 E-mail: finearts@pref.fukui.lg.jp
公式HP	http://info.pref.fukui.jp/bunka/bijutukan/bunka1.html